

拝啓

今年も、早や2月の末となりました。お元気でお過ごしのことと思います。庭の紅梅が、大体満開になりました。今年の1月、2月はずいぶん寒かったと思いますが、皆さんもよくがんばって寒さを耐えられました。もうすぐこぶしや桜などたくさんの花が咲く春です。

いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。第71号をお送り致します。引き続き、バジレア・シュリンク先生の「愛のまなざし 神の子の日ごとのよりどころ」から引用の第4回目をお届けします。バジレア・シュリンク先生は、ドイツの方ですが、ヒットラーのナチス政権時代には、告白教会のメンバーでした。12月1日の南原シンポジウムで、宮田光雄先生に「カール・バルトと南原繁」という題で講演をお願いして以来、バルト(1886 - 1968)に関心が出て、伝記を読みました。告白教会は、ヒットラー政権に反対したドイツのキリスト教会連合ですが、バルトは告白教会のバルメン宣言(1934)の起草者の中心者でした。バルトは、1935年にはドイツを追われ、スイスのバーゼル大学の教授として過ごしました。

私は、毎月1回南原繁研究会で、南原先生の著作集の読書会を開いています。平成16年の4月に第1回を開いて以来、今年の2月22日の第47回は、著作集10巻全部を読み終わり、加藤節先生のまとめのレポートでした。4年間1回も休まず、かなりレベルの高い議論を続けて第1順目を終えられたことは、感銘がありました。その間、シンポジウムも4回開きました。

南原研究会は、鴨下重彦先生が、私の『真善美・信仰』を読まれて、未知の私に、南原研究会を始めたいが協力して欲しいというご依頼があって、スタートしたものです。最初スタートしたときには、別に計画があったわけではないのですが、4年間で著作集全部を読み終え、4回のシンポジウムを開くという実績になりました。南原先生のゼミナールで、4年間しっかりと教えて頂いたという感じです。ソクラテス、プラトン、ルター、ルソー、カント、フィヒテなどの古今の哲学者が、したわしく思えるようになりました。ボランティアのあつまりですが、これからはボランティアの会合というのが重要な役割りを果たすものらしいですね。

もうしばらくは寒い日と暖かい日が入り混じると思います。どうぞ御身体御自愛の程祈りもうしあげます。

敬具

山口周三

平成20年2月27日

エンカウンターの読者各位